

台東鳥瞰

TAI

TO

CHO

KAN

vol.

04

2020 SPRING

特集

物語が生まれる街

語られ、描かれる無数の記録

・台東区を舞台に繰り広げられる物語
・年表から見る物語と街の結びつき
・物語を巡る浅草街歩き
・令和時代、「台東区の物語」を考える
〈コラム〉聖地巡礼とは



物語が 生まれる街

台東区で育まれてきた、豊かな創造の世界たち

多様な人と文化が交差してきた台東区は、これまで様々な物語の舞台として描かれ、語られ、親しまれてきました。芸能の世界で輝くスターの成長や、夢を追い新しい生活を始める姿、様々な文化や時代の色が混ざり合う風景など、台東区独自の物語が多くあります。

それらは文学や映画といった芸術作品のなかだけでなく現実にも文化施設や碑として残り、現在を生きる私たちに痕跡を伝えています。

その奥に広がる鮮やかな人間ドラマやささやかなエピソードは、歴史の流れのなかでどのように変遷し、そして未来に描かれていくのでしょうか。多彩な物語が集まる台東区を鳥瞰し、豊かな創造の世界を巡り歩きましょう。



台東区を舞台に 繰り広げられる物語

上野駅

- 歌『あゝ上野駅』（1964）
井沢八郎
- 映画『おもひでぽろぽろ』（1991）

1960年代、集団就職で東北や北陸から列車で上京した若者の故郷への思いを歌った『あゝ上野駅』や、上野発の寝台列車「あけぼの」に乗る主人公が印象的な『おもひでぽろぽろ』など、終着駅であった上野駅から多くの物語が生まれた。

アメ横センタービル

- NHK連続テレビ小説『あまちゃん』（2013）
- 東北・北三陸の田舎町で海女さんを目指すヒロインが「地元アイドル」となり上京。北三陸と東京を結ぶ玄関口・上野駅のほか、アメ横センタービルが、デビューを夢見て奮闘するヒロインの重要な舞台として描かれた。

明治時代から現代に至るまで、小説、歌謡曲、映画やドラマ、アニメに漫画など、台東区が登場する作品は数知れず。作家たちは台東区に何を見て、どのような作品をつくり出してきたのでしょうか。その一部をご紹介します。

かっぱ橋道具街

- TVアニメ『さらざんまい』（2019）
- 「かっぱ」が登場する不思議な物語の舞台として、かっぱ橋道具街や浅草の実際にある風景が数多く登場する。「台東区舞台探訪MAP」を手に、登場するスポットを巡るファンも多い。
©イクニラッパー／シリコマンダース

千束稲荷神社

- 小説『たけくらべ』（1895）
樋口一葉

台東区竜泉を舞台に繰り広げられる思春期の少年少女の物語は、千束稲荷神社の夏祭りから始まる。吉原遊郭と共存する竜泉の特異な環境や空気感が、実際にこの土地で暮らした一葉ならではの観察眼と視点で描かれる。

一葉記念館

今戸神社

今戸橋

- 小説『鬼平犯科帳』（1967～）
池波正太郎

現在は親柱のみ残っている今戸橋は、隅田川と山谷堀が合流するところに架かっていた橋。長谷川平蔵がひいきにする船宿「嶋や」が今戸橋のたもとにあり、平蔵たちの浅草方面における重要な捜査拠点としてたびたび登場。

東洋館 浅草フランス座 演芸場

- 歌『浅草キッド』（1986）
ビートたけし

ビートたけし自ら作詞作曲。芸人として売れることを目指し、浅草フランス座でエレベーターボーイとして働きながら修業をした自身の下積み時代を歌った曲。仲見世の行きつけの居酒屋や演芸場など思い出の場が登場する。

鳥瞰
COLUMN

聖地巡礼とは

北海道大学准教授
岡本亮輔／文

アニメなどの作品に登場する場所が、物語と紐づき“聖地”として注目される昨今。そもそも“聖地”とは何か？ 宗教学者・岡本先生に伺いました。

聖地とは何か。エルサレム、メッカ、ブッダガヤなどを思い浮かべると信仰に裏打ちされた縁遠いものを感じるかもしれない。だが、これらに共通するのは、その場所であれがたい出来事があり、その記憶を多くの人が共有していることだ。その出来事がフィクションでも構わない。聖書ではイエスの言行が生き生きと描かれるが、ほとんどは歴史的事実ではないはずだ。しかし、キリスト教信者は、イエスの物語を古くから受け継がれてきた記憶として共有する。

このように考えると台東区は世界有数の聖地の街だ。18世紀、江戸が世界有数の都市になった頃、もっとも栄えたのが浅草と上野だ。100万人とも言われる住人たちが無数の物語を織り成し、その記憶が伝えられてきた。推古天皇の時代に開かれたという浅草寺は日本でも最古級の寺院だ。僧前浜成・竹成兄弟が隅田川で漁をしていると網に観音様の像がかかった。観音像は秘仏として寺に伝わり、最初に像が祀られた場所も駒形堂として記憶されている。浅草と上野をつなぐ入谷には小野照崎神社がある。祭神の小野篁は平安時代の公卿・歌人であり、才人として知られた。だからこそ、同社は雅楽など芸術文化の振興に熱心に取り組んでいる。そして、上野の寛永寺は徳川将軍家の聖地だ。現在の東京国立博物館を本坊とする広大な敷地を有していたが、上野戦争では新政府軍によって徹底的に破壊された。しかし、筆者が寛永寺幼稚園に通っていたときには、大政奉還後に徳川慶喜が謹慎していた部屋を訪れた。聖地の記憶が受け継がれている。

近年では、一般に聖地といえば、映画・ドラマやアニメの舞台になった場所を指す。この点でも台東区は文句なしに聖地の街だ。とくに上野恩賜公園、谷中界隈を舞台にした作品は多い。例えば松が谷にある小さな秋葉神社は『シュタインズ・ゲート』の舞台として人を集めるようになった。新しい物語が古い物語を掘り起こし、新たな聖地をつくり続けているのである。

おかもと・りょうすけ

1979年東京都台東区上野生まれ。北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院准教授。専門は観光社会学、宗教学。主な著書に『聖地巡礼―世界遺産からアニメの舞台まで』（中公新書）、『江戸東京の聖地を歩く』（ちくま新書）など多数。

年表から見る 物語と街の結びつき

江戸から令和へ。

大きな転換期を幾度も乗り越え変容し続けてきた台東区。その歴史をたどりながら、台東区で生まれた作品や活躍した人々の足跡をもとに、物語と街のつながりを鳥瞰します。

台東区の出来事

628 浅草寺創建

1625 寛永寺建立
1657 元は現在の日本橋人形町にあった吉原遊廓が、明暦の大火後浅草寺裏の日本堤に移転
1842 幕府公認の芝居小屋・江戸三座（中村座、市村座、森田座※移転当時は河原崎座が興行）が猿若町に移転。江戸歌舞伎隆盛の場となる

1872 日本初の博物館として東京国立博物館が創立（上野公園には1882年に移転）
1876 日本初の公園として上野恩賜公園が開園
1877 第1回内国勸業博覧会が上野恩賜公園で開催
教育博物館（現・国立科学博物館）創立
1884 浅草公園内が区分けされ、浅草六区が定められる
1887 東京美術学校（現・東京藝術大学）設立
浅草オペラ発祥の劇場、常盤座開館
1890 日本初の電動式エレベーターを備えた12階建ての
凌雲閣が完成
1903 日本初の映画常設館、電気館誕生

1917 浅草オペラ誕生。西洋音楽の大衆化の先駆けとなる
1923 関東大震災発生
1926 日本初の公立美術館、東京府美術館（現・東京都美術館）開館

1927 東洋初の地下鉄開通（上野・浅草間）
1937 浅草国際劇場オープン
1945 東京大空襲
アメヤ横丁の始まり
1951 浅草フランス座開業
1954 東北・上野間を走る夜行列車が臨時で運行され
多くの人が上京
1959 国立西洋美術館開館
浅草フランス座内に東洋劇場誕生
1964 浅草演芸ホール誕生
1985 東北・上越新幹線が上野駅まで延伸

台東区で活躍した人／描かれた作品

1798 初代三笑亭可楽が下谷神社で寄席興行を行って以降、文化・文政期（1804～1830年）には江戸に100軒以上の寄席ができる
1860 狂言作者・河竹黙阿弥の代表作『三人吉三廓初寛』初演。四代目市川小團次とともに、小悪党を主人公とした「白浪狂言」を多く生み出し幕末の江戸歌舞伎の全盛期を支える

1890 森鷗外『舞姫』（池之端の鷗外荘にて執筆）
1891 幸田露伴『五重塔』（同年に谷中に引っ越し、谷中・天王寺の五重塔がモデル）
1894 正岡子規、子規庵に移住（亡くなるまでの8年間暮らす）
1895 樋口一葉『たけくらべ』（駄菓子屋を営み暮らした竜泉での生活から着想したと言われる）
1904 5代目古今亭志ん生（当時14歳）が浅草に引っ越し、浅草で落語と出会う
1908 夏目漱石『三四郎』（「神谷バー」が登場）
1910 石川啄木『一握の砂』（現在、上野駅に歌碑が建つ）

1923 池波正太郎、浅草聖天町（現・浅草）で誕生。少年時代は浅草永住町（現・元浅草）で暮らす

1929 榎本健一（エノケン）が浅草で劇団「カジノ・フォーリー」を立ち上げ川端康成『浅草紅団』（カジノ・フォーリーを紹介するなど浅草ブームを起こす）
1932 エノケン一座、松竹座と提携
1933 古川緑波（ロッパ）が常盤座で劇団「笑の王国」を旗揚げ
1948 太宰治『人間失格』（「神谷バー」のデンキブランが登場）
1951 永井荷風『断腸亭日乗』（浅草六区に通いつめ、42年間書き続けた日記のなかにもたびたび登場）
1953 渥美清、浅草フランス座で活躍
1964 井沢八郎『あゝ上野駅』（集団就職の若者の心を歌い大ヒット）
1966 萩本欽一と坂上二郎のコンビ・コント55号が浅草松竹演芸場でデビュー
1967 池波正太郎『鬼平犯科帳』連載開始
1986 ビートたけし『浅草キッド』（エレベーターボーイとしてフランス座に入り修業を積んだ浅草での思い出を回想）

1991 映画『おもひでぽろぽろ』
2013 TVドラマ『あまちゃん』（上京した主人公がアメ横で奮闘）
朝霧カフカ・春河35 漫画『文豪ストレイドッグス』連載開始（文豪がキャラクター化された物語で樋口一葉も登場）
2019 TVアニメ『さらざんまい』（かつて橋道具街周辺が舞台）
TVドラマ『いだてん』（大正・昭和期の浅草や、ビートたけし演じる5代目古今亭志ん生が登場）

台東区と街のつながり5要素

江戸最大、庶民文化の発信地

浅草寺裏の奥山の見世物小屋に、吉原遊郭、芝居小屋が集まる猿若町など、このエリアは江戸最大の歓楽街。庶民発信の芸能文化が盛り上がり、連日にぎわう盛り場の様子は浮世絵に描かれたり、落語の演目になったりと、次々と新しい文化を生み出していった。



歌川広重作「東都繁栄の図（市村座）」
（国立国会図書館デジタルコレクションより転載）

いち早く文化芸術が発展

明治に入り博物館や東京美術学校などが設立され芸術の土壌がととのった上野周辺。大学が近いこともあり正岡子規や幸田露伴など多くの文化人や芸術家が谷中、上野桜木、根津、池之端周辺に住居を構え、制作活動を行った。森鷗外らが通った「上野精養軒」や夏目漱石や太宰治らが通った「神谷バー」など、日常を過ごした土地の風景や最前にしたお店といった、文豪たちが愛した場所の記憶を、いまでも見つけることができる。

スターを育てる街

エノケン、ロッパ、ビートたけし、萩本欽一、渥美清…、浅草で修業し浅草の劇場で活躍した人気者たちが、次々と全国区のスターに登りつめていった。劇場や寄席が集まる浅草六区の街全体で芸人を育て応援する温かい人情は、いまでも変わらず。



エノケンが活躍した軽演劇の劇団カジノ・フォーリーなどでにぎわった浅草六区の風景（大正から昭和初期に撮影）
©Alamy Stock Photo/amanaimages

「夢」への入り口

古くは石川啄木が歌を詠んだように、東北の故郷と東京を結ぶ玄関口であった上野駅。高度経済成長期の昭和30年代にピークを迎えた集団就職で、北陸や東北から多くの若者たちが上京したことで、「夢」への入り口の象徴として上野駅が多くの作品に描かれた。

文化が交流する場所

歓楽街や交通の要所として発展した歴史や、戦後に自然発生したアメ横の市場の歴史などが示すように、様々なバックグラウンドを持つ人々が集まりにぎわいを創出してきた台東区。現在では、空港からのアクセスの良さもあり、海外からの観光客にも人気が高く、文化が交流する場所に。異文化が混ざり合う“混沌”から『さらざんまい』などの新たな作品が生まれている。

江戸

1603→1867

明治

1868→1912

大正

1912→1926

昭和

1926→1989

平成

1989→2019

令和

2019→



物語を巡る 浅草街歩き

江戸時代には随一の盛り場として、明治以降は最先端のエンターテインメントが発信される娯楽の中心地として、浅草には脈々と続くにぎわいの歴史があります。この街で生まれた様々な物語を伝える場所を探しに、浅草の街をのんびり歩いて巡ります。



五千円札肖像への採用を機に改築された建物も見どころ

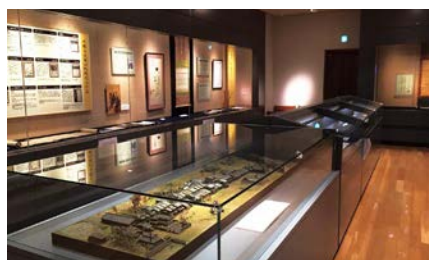
INFO

◆ 台東区竜泉3-18-4
● 9:00-16:30(入館は16:00まで) / 月休
☎ 03-3873-0004
🌐 www.taitocity.net/zaidan/ichiyo/
🎫 入館: 大人300円 / 小中高生100円

樋口一葉と 台東区

「一葉記念館の成り立ちには、地元有志の存在は欠かせません。竜泉は一葉が9ヶ月余り暮らし、不朽の名作『たけくらべ』の着想を得た地です。このことに感銘を受けた地元の人々は、記念碑を建て、さらに記念館建設のために敷地を台東区に寄付しました。一葉の功績に対する、人々の熱意と努力によって記念館は開館したのです。」

一葉記念館 学芸員 石井広土さん



SPOT 1 竜泉の人々が守る一葉の功績 一葉記念館

名作『たけくらべ』において、竜泉に住む人々の暮らしを描いた樋口一葉。その功績を残すために地元有志の働きにより昭和36年に開館した一葉記念館は、一葉が実際に暮らした竜泉の旧居跡近くにある。一葉直筆の『たけくらべ』未定稿をはじめ、貴重な遺品も数多く展示。



池波正太郎の書斎の再現コーナーは必見

◆ 台東区西浅草3-25-16 台東区生涯学習センター1階
台東区立中央図書館内
● 月-土 9:00-20:00
日・祝 9:00-17:00 / 第3木曜休
☎ 03-5246-5915
🌐 www.taitocity.net/tai-lib/ikenami
🎫 入館無料

池波正太郎と台東区

「池波が6歳から成人まで暮らした永住町(当時)は、職人や商いの人が多く住む典型的な下町。江戸文化の名残を色濃くとどめる情緒ある街のなかで、その空気を肌で感じて育ったからこそそのリアリティ、下町で暮らす人々の目線に立って構築された物語こそ、池波文学の最大の特徴です。」



池波正太郎
記念文庫 指導員
鶴松房治さん

六区の記憶が蘇るレトロ喫茶

SPOT 3 ピーター

店に入るとまず目に飛び込んでくるのが壁一面に描かれた絵。常連客だった紙芝居『黄金バット』の作者の一人、加太こうじさんによるもので、エノケン、ロッパ、永井荷風など浅草ゆかりのスターたちが大胆に描かれる。往年のスターに見守られながらいただく、出汁の効いたカレーは絶品だ。



お昼休憩は
ピーター名物のカレーを!



INFO

◆ 台東区西浅草3-13-1
● 10:00-21:00(祝日12:00-20:00) / 日休
☎ 03-3844-5984



1921年(大正10年)築の
モダンな外観

SPOT 4 文豪も愛した日本初のバー 神谷バー

1880年の創業以来、明治、大正、昭和、平成、令和の浅草をずっと見守ってきた名店。太宰治が『人間失格』の中で「酔いの早く発するのは、電気ブランの右に出るものはない」と書いたほか、萩原朔太郎、芥川龍之介など数多くの作家たちが好んだ「デンキブラン」はいまも健在。時代を経ても庶民の社交場の活気は変わらない。

INFO

◆ 台東区浅草1-1-1
● 11:30-22:00 / 火休
☎ 03-3841-5400
🌐 www.kamiya-bar.com

寄り道!



ビートたけしの
“予約済”看板も必見!
浅草を愛した
33人のスターの
顔写真が並ぶ
「浅草六区通り」

寄り道!



浅草公会堂前の
スターの広場で
往年のスターの
手形を堪能

おすすめ街歩きルート

所要時間 約40分(移動のみ)

\ START /

三ノ輪駅

徒歩約8分

1 一葉記念館

徒歩約15分

2 池波正太郎記念文庫

徒歩約5分

3 ピーター

徒歩約5分

\ GOAL /

浅草駅

徒歩約1分

4 神谷バー

徒歩約5分

浅草公会堂前

徒歩約1分

浅草六区通り



令和時代、「台東区の物語」を考える

佐藤洋一(早稲田大学教授) × 岡本亮輔(北海道大学准教授)

台東区で多くの物語が生まれてきた理由は为什么呢。また、これからの台東区ではどのような物語が描かれるのでしょうか。都市空間イメージ史の研究を行う佐藤先生と、聖地の研究を行う宗教学者・岡本先生のお二人にお話を伺いました。

“聖地”は、俗世とは別の文脈を持って存在する場所

——昨今ではアニメや映画など物語の文脈をもとに土地を巡ることを聖地巡礼と呼ぶ現象も生まれていますね。

岡本 | 私は本来の意味で使われる宗教に根ざした“聖地”から研究を出発していますが(→P5コラム)“聖地”という言葉を広く、物語が語られてきた場所のこととしてお話をさせていたきたいと思います。

そうは言っても、“聖地”も様々ありますよね。例えば上野恩賜公園というのは典型的な“聖地”です。江戸時代には寛永寺があって、明治以降になると動物園や博物館もできました。内国勧業博覧会も開催されたりと、近代日本を象徴するような場所で、出来事ごとに語られる物語も多く残されています。

佐藤 | 私は残された写真や映像から都市イメージを読み解く研究をしており、台東区の古い写真や地図も多く見てきました。“聖地”として語り継がれる土地は知名度の広がりに加えて、語られる物語の時間的な継続性も高いと感じます。個人の思い出やエピソードと、“聖地”で語られる物語を区別するものとしても、時間は重要なかもしれません。

岡本 | 長い時間を経ても、多くの人に共有され語られることが重要なかもしれませんね。知名度のある場所に限らず「寄席発祥の地」と言われる下谷神社のようなごく普通の神社も、物語とともにいまも語り継がれています。世の中が変わってもそこで語られることは基本的にあまり変わらず、世俗の文脈とは違う流

れのなかで存在しています。

未来の台東区の物語は、いかにして語られるか

佐藤 | 下谷神社ほどのスケールの神社は台東区に多いですね。鳥越神社や小野照崎神社も、ほどほどの規模だからこそ、ローカルにきちっと根ざしていて、お祭り也非常に盛んです。そういうコミュニティが物語を語り継ぎ、守っているのでしょう。台東区を特徴づけているのは、江戸時代から人口が多いことです。加えて、いろいろな人が密集して暮らす多様性がある。明治以降では大学や芸術も含めて上野には西洋的な知識が入ってきた。いっぽうで、浅草では当時最先端のエンターテインメントも盛り上がっていましたね。

岡本 | 江戸時代に人同士をつなぐコミュニティができ上がり、その上に明治以降入ってきた文化芸術の教養やエンターテインメントの盛り上がり重なった。その層が物語を生み出す土壌になったのかもしれない。——そうすると、これから令和の時代に生まれる物語はどうなっていくのでしょうか。

岡本 | これまでの時代とは明らかに、“物語る”媒体が変わってきているなど感じます。昔は小説のようなテキストだったのが、アニメが出てきてInstagramが出てきて、より即物的になっている。パッと見てわかりやすく伝わる内容がバズるようになっている。

佐藤 | 浅草寺界隈などは見てすぐわかりやすいからSNSでも人気ですね。街のテキストを深く読まなければならない場所は“わかり

にくい”場所と思われて敬遠されてしまうように感じます。しかし、それでも場所に関する情報は気軽に発信されるようになりました。

岡本 | 最近今戸神社が恋愛パワースポットとして注目されたことをきっかけに、これまで観光客があまり足を運び入れていなかったエリアに人が来るようになっていそうです。パッと見てわかりやすい情報をきっかけに新しいエリアが発見されていくこともあるのでしょうか。

佐藤 | 台東区はわかりやすい魅力も、深堀りしたときに見えてくる魅力もそろっている点で最大の特徴なのかもしれません。庶民的なところで注目を集めたエリアも、少し歴史をひもとくと学術的な面白さが見えてくる。台東区は旧町名ひとつとっても面白いものが多いですから。最近は何の町名も「上野」や「浅草」になっていって細かい町名が消えていますが、わかりやすさが重要視されるいっぽうで、細かく見ることで気がつく面白さも残していきたいですね。



浅草六区を歩く二人、奥に見える赤い門は奥山大木戸。左から岡本、佐藤

佐藤洋一(さとう・よういち)

早稲田大学社会科学総合学院教授。1966年東京都生まれ。都市形成史および都市空間の映像表現を専門とし、都市イメージ史に詳しい。主な著書に『米軍が見た東京1945秋』(洋泉社)、『地図物語 地図と写真でたどるあの日の浅草—昭和26年から30年代の思い出と出会う』(武揚堂)など。

岡本亮輔(おかもと・りょうすけ)

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院准教授。1979年東京都台東区上野生まれ。専門は観光社会学、宗教学。主な著書に『聖地巡礼—世界遺産からアニメの舞台まで』(中公新書)、『江戸東京の聖地を歩く』(ちくま新書)など多数。

藝大×物語 TOPIC

像にこめられた物語を読み解き

未来につなげる“人”を育てる

東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室

藪内佐斗司先生

東京藝術大学の大学院美術研究科文化財保存学専攻では、古い仏像を保存修復し未来に継承していくための研究が行われています。大学院修士・博士課程からなる保存修復彫刻研究室では、時代ごとに異なる仏像制作の古典技法を徹底的に研究したのち、文化財の保存修復に必要な技術を身に付けています。この研究室の取り組みについて、藪内佐斗司先生にお話を伺いました。

——文化財の保存修復を行ううえで大切にされている理念とは？

今から50年以上前にユネスコが定めた文化財修理のための3大原則というものがあります。

①当初部最優先(造られたときの状態を最も尊重しましょう)②現状維持(変更も含むその像の歴史を大事にしましょう)③可逆性(未来には技術が進歩してより良い修復方法があるかもしれないので、いまの状態に戻せるような修理をしましょう)

この3つのせめぎ合いのなかで、我々は修理をしなければなりません。人間のお医者さんと同じで、それぞれの像に合わせて、3原則のどの部分に重きを置くのかを、複数の専門家の意見を聞きながら検討していきます。大事なことは決して単独では行わないこと。この仏像が持っている長い歴史の中の

ほんの一瞬だけを切り取って自分が修復に携わっているということを常に考えます。自分が正しいんだという気持ちだけでは絶対にいけません。未来にもつながっていく長い歴史のほんの一部でしかないんだという謙虚な気持ちを学生にも伝えていきます。

——藝大の保存修復の特徴とは？

目新しいものばかりを追いかけるのではなく、古いことをしっかり研究して、そのうえでより良いもの、新しいものをつくっていくのが東京藝大の本流です。砂の上に家が建てられないのと一緒に、古いものを知ったうえでつくるのと、知らないでつくるのでは結果がまったく異なります。「温故知新」の考えが大前提。昔の人と同じレベルの技術と感性を持った人材を現在に蘇らせる



現在、研究室で修復を行っている茨城県雨引山薬法寺の金剛力士立像。鎌倉時代に制作された約2mの力士像の像内からは、室町時代の修理銘札が発見された。

ことが、この研究室の意義です。

——そもそも仏像を保存して受け継ぐということはどういうことなのでしょうか？

現在まで遺されている仏像は、過去の時代の社会が「この像を修理したい」と願い、手から手へ、時代を超えて大切に修復され受け継がれてきた歴史の結果です。その像に、後世にまで残したいと思わせるパワーがあったということです。仏像はタイムカプセルですから、像を保存することは、祖先が私たちに伝えてくれた大切な遺産を読み解き、現代の技術と知性をもって未来に伝えていくこと。芸術とは、人に喜んでもらえてなんぼですから。喜んでもらえるからこそ、次の時代に伝えられていくんです。



博士後期課程3年の重松優志さんが研究するのは、東大寺の中でもとくに古く由緒ある秘仏・東大寺法華堂執金剛神立像。模刻制作をすることで、古典塑像の内部構造・技法を研究した。



博士後期課程2年の李品誼さんは、3Dデータをもとに過去に修理された獅子の頭部の復元を行っている。様々な過去の資料の研究と最新技術のデータを読み解き、適切な素材や技法を検討していく。

台東区のカルチャー・イベントレビュー

台東区で開催された文化イベントをピックアップしてご紹介。

樋口一葉『たけくらべ』の舞台を訪問 一葉祭(一葉記念館)



▲ 1チーム10名程度で巡る。奥に写る頭よりも高い石垣は、当時の廓内の高さを示す。



▲ フェンスの向こうには、吉原とその外をつなぐ跳ね橋に通じると思われる横道が見える。

樋口一葉の命日11月23日を挟む22日～24日の3日間に開催。一葉を偲ぶイベントのひとつとして、ボランティアガイドによる『たけくらべ』ゆかりの地を巡るツアーが行われた。竜泉にある神社をはじめとして、吉原などの『たけくらべ』舞台地を巡る。例えば物語冒頭にも登場する吉原の敷地をとりかこむ「おはぐろどぶ」の痕跡や、帰り道多くの人が吉原での時間を名残惜しんだという「見返り柳」などを、ガイドさんの丁寧な解説とともに巡った。当時の吉原の区画割はほぼ現在の吉原に継承されているため、実際に歩いてみることで物語の様子も想像しやすくなる。毎年開催されているため、ぜひチェックしていただきたい。

INFORMATION

■ 2019年11月22日～11月24日 ■ 台東区竜泉3-18-4
● 無料 □ www.taitocity.net/zaidan/ichiyo/

滋賀・長浜の地で守り継がれてきた観音様を不忍池前の静かなスペースで鑑賞できるギャラリー。3月中旬まで正妙寺の「千手千足観音立像」を鑑賞できる。よく知られている千手観音像とは異なり、千本の足を持つ観音様はとても珍しい。「遠くからでも早くに駆けつけてくださる」と現地では伝えられている。長浜の風土を伝えようと始まった本プロジェクトでは、約2～3ヶ月の入れ替え制で観音様をお迎えする。3月17日～5月下旬には、長浜市指定文化財 聖観音立像(長浜城歴史博物館所蔵)を迎える予定。長浜各地のお堂にいらっしゃる観音様は、千年という単位でその地と結びつきを持つ。仏像ファンでない方にも、ぜひご鑑賞いただきたい。

INFORMATION

■ 2019年12月24日～2020年3月15日
■ 台東区上野2-14-27 上野の森ファーストビル1F
京成上野駅 池之端より徒歩1分
☎ 03-6806-0103 ● 無料 ◎ 毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)
□ www.nagahama-kannon-house.jp/
※2020年10月31日閉館予定

観音の里「長浜」の観音様を間近で鑑賞

びわ湖長浜KANNON HOUSE



▲ 長浜市高月町にある正妙寺よりお迎えした「千手千足観音立像」。360°間近で鑑賞できる貴重な機会だ。



▲ ギャラリーではこれまでお迎えした観音像のパネル展示のほか、長浜を紹介する映像も放映。

たいとう文化発信プログラム

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を契機として、台東区内の文化・芸術に関わる様々な取り組みをPRし、世界に誇れる歴史と文化を持つ区の魅力を国内外へ発信することを目的として策定されたプログラムです。このプログラムを通じて、観光客はもちろん、区内に住んでいる方や働いている方にも台東区の魅力を発信していきます。

ロゴマークデザインについて

台東の文字を変形させたロゴマーク。「多様な文化を和える(あえる)」というテーマで、様々な文化が混ざり合って形成された台東区を、異なる3つの形で表現しています。

台東区文化芸術総合サイト「たいとう文化マルシェ」

台東区内の魅力あふれる文化イベント・文化施設・展覧会レポートなどを紹介する文化芸術総合サイト。あなたの文化イベントも登録可能。



www.culture.city.taito.lg.jp/ja

関連企画

「台東区で生まれた物語を集めて鳥瞰!」

監修者・早稲田大学佐藤洋一先生と、本誌企画編集者による『台東鳥瞰』4号トークイベント

日時: 2020年3月27日(金) 18:30-19:30(18:00開場)
場所: 浅草文化観光センター 定員: 50名(満席になり次第受付終了)
お申し込み: <https://taitochokan4.peatix.com>



お申し込みはQRから

『台東鳥瞰』とは

台東区が持つ魅力は、世界的な観光スポットやイベントにとどまらず、ひっそりと続く伝統や日常に息づく習慣など、じつに多様です。『台東鳥瞰』は、それらを鳥瞰し見直すことで新しい発見や気づきを提供する、年2回発行の文化芸術広報誌です。

発行日 — 2020年3月1日
発行 — 台東区文化産業観光部 文化振興課
監修 — 佐藤洋一(早稲田大学)
企画 — 田尾圭一郎(美術出版社)
編集 — 大井智水(美術出版社)、裏谷文野
A D — 中野由貴
印刷 — 凸版印刷株式会社
協力 — 一葉記念館、池波正太郎記念文庫

観覧無料!